

短期派遣留学プログラムによる SDGs に対する興味関心の向上

Increasing Interest in SDGs through Short-term Study Abroad Programs

北川 達也^{*1}, 田中 孝治^{*2}

Tatsuya KITAGAWA^{*1}, Koji TANAKA^{*2}

^{*1}金沢工業大学情報フロンティア学部経営情報学科

^{*1}Department of Management Systems, College of informatics and Human Communication, KIT

^{*2}金沢工業大学情報フロンティア学部心理科学科

^{*2} Department of Psychological Science, College of informatics and Human Communication, KIT

Email: tatsuya.kitagawa@neptune.kanazawa-it.ac.jp

あらまし：グローバル人材育成を目指し、SDGs を学習の軸としたベトナム短期派遣留学プログラムを実施した。本研究では、参加学生を対象に、SDGs の 17 個の各ゴールに対する興味関心の度合いについて、プログラムの実施前後で調査した。その結果、プログラム前後でゴール 1・9・14 に対する興味関心が向上していることが示された。農村部見学体験や地下鉄建設現場視察などの活動が興味関心に影響を与えた結果であるといえる。

キーワード：SDGs, 異文化理解, パートナーシップ, 短期派遣留学プログラム

1. はじめに

国連全加盟国が合意した SDGs が、内閣においても SDGs 推進本部が設置されたことを皮切りに、日本中で広がりを見せている。教育界においても、学習指導要領の改訂が行われ、中央教育審議会の答申において、「持続可能な開発のための教育 (ESD) は次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である」と述べられている。このような流れを受け、大学機関においても、SDGs を達成するための ESD の推進が求められている⁽¹⁾。また、SDGs は、世界共通の達成目標であり、達成のためには国や文化を超えたパートナーシップが重要となる。筆者らが所属する教育機関 (以下、本学と略す) は、このような流れを踏まえ、他の国の大学機関と共に、各国内の地域活性化と地球規模課題の解決を両立する次世代のグローバル人材を輩出するための新たな教育カリキュラムの在り方を模索している。

すでに本学では、SDGs への低関心層に対する意識啓発を促す教育カリキュラムとして、SDGs に関する基礎知識の習得のみならず、SDGs の個別目標に関するディスカッションや提言策定を通じて、自らの意思で特定の SDGs に関連する課題を選択し、自分事として課題解決に向けて行動することを促す授業が実施されている⁽²⁾。この授業により、SDGs への興味関心が向上しているものの、情報を得ることによってもたらされた興味関心を持続させ、更に向上させるためには、その情報を知識に変換する経験が必要であると考えられる。

そこで本研究では、情報を知識に変換するための経験として、ベトナム人学生とのチーム活動及びフィールドワークを取り入れた、短期間でのベトナム留学プログラムへの参加が、SDGs の各ゴールに対する更なる興味関心の向上に資するか否かを検証することを目的とする。

2. ベトナム短期派遣留学プログラムの概要

ベトナム短期派遣留学プログラム (以下、プログラムと略す) は、2018 年 2 月 21 日から 2 月 28 日までの期間 (移動日を含む) に実施された。参加者は本学の学生 10 名、現地の大学 (越日工業大学:VJIT) の学生 15 名程度であった。VJIT からの参加人数は、同時期に開講されている別授業に出席する必要があるため流動的であった。本プログラムでは、本学の学生と VJIT の学生の混成チーム (3 チーム) を構成し、チームごとに SDGs に関連するベトナムの課題を発見して、課題解決方法を考案する活動を行った。プログラムの実施内容の概要を表 1 に示す。

表 1 教育プログラムのスケジュール概要

日程	実施内容
1日目	<ul style="list-style-type: none"> ● SDGsに関する概要説明 ● チームごとにSDGsに関連するベトナムの課題の調査とディスカッション
2日目	<ul style="list-style-type: none"> ● メコンデルタでのフィールドワーク * 周辺の農村部視察、伝統芸能鑑賞、手漕ぎボートでの川下り、水上マーケット視察
3日目	<ul style="list-style-type: none"> ● クチの地下道でのフィールドワーク * ベトナム戦争の現場視察 ● ホーチミン市都市部の視察 * 建設中の地下鉄現場周辺視察
4日目	<ul style="list-style-type: none"> ● フィールドワークでの体験を踏まえて、チームごとに取り組む課題を決定 ● 課題解決に利用できそうな、ベトナムらしいリソースを全員でブレインストーミングして列挙
5日目	<ul style="list-style-type: none"> ● チームごとに、前日に列挙したベトナムらしいリソースと既存の世の中に存在するリソースを組み合わせ、解決策を考案
6日目	<ul style="list-style-type: none"> ● 取り組んだ課題と考案した解決策をチームごとに発表 ● 取り上げた課題に対して、各人ごとにこれから行っていくアクションを宣言
7日目	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本へ帰国

Goal	Pre (SD)	Post (SD)	Z	p
1	5.10 (1.85)	6.50 (0.97)	-2.03	0.04 *
2	5.40 (1.84)	6.10 (0.99)	-0.92	0.36
3	5.40 (1.78)	6.20 (1.03)	-1.41	0.16
4	5.70 (1.34)	6.10 (0.88)	-1.41	0.16
5	4.60 (1.71)	5.30 (1.25)	-1.60	0.11
6	6.10 (0.99)	6.30 (0.67)	-0.82	0.41
7	5.70 (1.06)	6.20 (0.92)	-1.89	0.06 †
8	6.20 (1.03)	6.40 (0.70)	-0.82	0.41
9	5.20 (1.55)	6.10 (1.20)	-2.46	0.01 *
10	6.00 (1.49)	6.56 (0.53)	-0.96	0.34
11	5.60 (1.07)	6.10 (1.20)	-1.63	0.10
12	6.10 (0.99)	6.50 (0.53)	-1.63	0.10
13	5.30 (1.57)	5.50 (1.43)	-1.00	0.32
14	5.00 (2.26)	6.10 (1.45)	-2.33	0.02 *
15	6.20 (1.14)	6.10 (0.88)	-0.38	0.71
16	5.20 (1.87)	5.70 (1.83)	-1.89	0.06 †
17	5.70 (1.34)	6.60 (0.97)	-0.38	0.07 †
Ave.	5.56	6.14		

Note. $n=10$; Wilcoxon signed-rank test. † $p < .10$, * $p < .05$.

図1 各ゴールの興味関心の評定値の変化

本プログラムのねらいは、国や文化を超えたパートナーシップの重要性の認識を促すこと、と、パートナーの抱えるSDGsの課題の実体験を促すことであった。前者については、国籍の異なるメンバーとチームを構成し活動するなかで、異なる価値観や考え方を持つメンバーでの協働によって今まで個人では考え付かなかった解決策のアイデアが生まれる課程を経験してもらう。後者については、フィールドワークを重視したスケジュールを設定し、課題を認識する機会に多く身を置いてもらう。これらの取り組みによって、事前の教育カリキュラムで芽生えた、SDGsの各ゴールに関連した課題に対する興味関心を、短期間で醸成させることを目的としている。本稿では、特に後者のフィールドワークによる経験の観点から事前事後調査の結果について考察を加える。

3. 興味関心についての事前事後評価

本学からの参加学生10名を対象に、プログラムの実施前後で、SDGsの17個の各ゴールに対する興味関心の度合いについて7段階評定を求めた(1:興味関心がない-7:興味関心がある)。事前の評定値は、平均5.56であり、参加者が本プログラムの参加前に既に興味関心が高い状態であったことがわかる。そこで、事前事後の興味関心度の評定値について、ウィルコクソンの符号順位検定を行ったところ、ゴール1「貧困をなくそう」、ゴール9「産業と技術革新の基盤をつくろう」、ゴール14「海の豊かさを守ろう」の三つのゴールに有意差が認められ、事前の評定値よりも事後の評定値の方が高かった(図1)。これらのゴールの興味関心の向上は、フィールドワークの影響を受けているものと考えられる。ゴールと

フィールドワークの関係については、以下のようにまとめることができる。

3.1 ゴール1「貧困をなくそう」

まず、ゴール1については、メコンデルタにおける農村部視察において、貧困層の生活を間近で見た経験が影響しているといえる。参加学生は、現地の住民がメコン川の汚れた水で体を洗う様子などを見て、自分たちの生活環境がいかに整っているかを強く実感した可能性が考えられる。

3.2 ゴール9「産業と技術革新の基盤をつくろう」

ゴール9については、ホーチミン市都市部での建設中の地下鉄現場を視察した経験が影響しているといえる。プログラムでの移動中に大量のバイクで埋め尽くされている道路を見て、地下鉄を含むインフラ整備の重要性を改めて強く認識した可能性が考えられる。

3.3 ゴール14「海の豊かさを守ろう」

ゴール14については、メコンデルタにおける川下りや水上マーケットの視察の経験が影響しているといえる。茶色に濁った川の水や捨てられているゴミを非常に近い距離で目の当たりにし、海洋汚染を強く実感した可能性が考えられる。

4. おわりに

本研究では、プログラムのねらいの一つである、フィールドワークでの実体験を重視することによるSDGsに関連した課題に対する更なる興味関心の向上については、おおむね達成できたと考える。

一方、もう一つのねらいである、パートナーシップの重要性の認識については、ゴール17「パートナーシップで目標を達成しよう」についての興味関心度合いの向上は有意な傾向を示すにとどまった(図1)。一定の効果がある可能性は示すことができたものの、VJITの参加学生が流動的であったことにより、十分に同一学生とのディスカッションができなかったことが原因と考えられる。

今後は、プログラムの実施時期を検討し、固定したメンバーで活動ができるよう配慮するなど現地での活動の改善を図るとともに、遠隔地のパートナーとの継続的なディスカッションを可能にする教育システム構築の検討が必要である。

謝辞

本研究の一部は科研費18H01050の助成を受けた。

参考文献

- (1) 中央教育審議会大学分科会将来構想部会: “今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ” http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyoo4/houkoku/_icsFiles/afieldfile/2018/07/03/1406578_01.pdf (参照日 2019.06.15)
- (2) 平本督太郎: “SDGsへの低関心層に対する意識啓発を促す教育プログラムの開発と評価”, KIT progress 工学教育研究 No26, pp.179-187 (2018)